

出張に出かけて困ること

「爆買い」が新語・流行語大賞になったのは一昨年のこと。当時、とくにアジアの某国からの買い物客は、飛行場や宿泊施設でのマナーも悪く、まわりの人々に多大な迷惑をかけるとして**鬻鬻**を買ったものだ。

爆買い現象は沈静化したようだが、地方都市に出かけると相変わらずの状況に悩まされることがよくある。

深夜になっても、某国のグループ一行がホテルの廊下でたむろして奇声をあげていたり、併設のレストランのバイキングでは他の客を押しつけて“占拠状態”になったりと、ひと昔前には見たこともなかったような光景が繰り広げられている。講演やセミナーなどの前に運悪く鉢合わせすると、気分の回復に余計なエネルギーを費やされる。

社会的なマナーについては、わが国の若者たちも年長世代からの評判は決してよいとはいえないが、彼我を比較すれば、まだかわいいものである。

そんなことを考えながら先日、特急電車のグリーン車を利用したところ、日本人でも困った乗客に遭遇した。幼児を2人連れた夫婦と、缶ビールを手に爆笑しているビジネス客の3人組と。幼児は車内でキャッキヤと声をあげて鬼ごっこをし、ビジネス客のほうはガハハ笑いで大いに盛り上がっていた。

グリーン車を利用する人の多くは、ゆったりと静かな時間を過ごしたいがために割増料金を支払う。そこで鬼ごっこや疑似宴会を始められては困るのだが、鬼ごっこや疑似宴会のためにこそグリーン車を利用しているのだ、と那些人たちは主張するかもしれない。どちらの言い分を是とするべきか。

人事コンサルタント 本田 有明

思い出したくない記憶

4年ほど前になるが、このコラムで似たようなことを書いた。第37回の「グリーン車はつらいよ?」。年配の団体客が菊水のワンカップを手にはほぼ車両を埋め尽くし、乾杯して盛り上がるという悪夢のような体験談だ。缶入り菊水の原酒は非常に香りが高く、この匂いを、これから仕事に出かける新幹線の中で嗅がされるのは拷問にも等しい。

……悪夢、拷問などという言葉を使ったせいか、今ふっと、さらに思い出したくない記憶を思い出してしまった。ここまでの話の流れとはガラリと変わるが、“Story Street”ではなく“Street Story”というべき逸話である。

講演後の宴席からホテルに帰る道すがら、一組の男女の喧嘩に出くわした。蹴りありパンチあり、プロレスさながらの派手な喧嘩だ。茫然としていると、女性がこちらに走ってきて「助けてください」と言う。

どうすべきか考える暇もなく、女性が私の手を握って走り出した。振り返ると、男は怒鳴りながら鬼の形相で追ってくる。私は流れのまま女性と一緒に逃げた。

しばらく必死に走り、息が切れたところで路上に倒れ込んだ。相手の顔を見ると、目もとがはれ上がり、唇から血を流している。

「警察に電話をしましょう」と言うと、「大丈夫、いつものことだから」との答え。

ひと息ついてみると、曲がり角から、にゅうっと男の姿が。「あ、いた。この野郎!」

今度は別々に走り出した。どれほど走ったか、記憶が定かでない。なんとか逃げ切ってホテルに着いたものの、深夜の激走で酔いがぶり返し、翌日は二日酔いに。菊水どころの話ではなかった。